

キリスト教の独自性に就て

岡 精 三

前書き

日本キリスト教協議会（N，C，C）の一機関に宗教研究所がある⁽¹⁾。毎年諸宗教の中から一つを選んで研究ゼミナールを開催している。今年（1983年）は出雲大社教が選ばれ、昨年はイスラム教、一昨年はユダヤ教、一昨年はユダヤ教、一昨々年は金光教、その前年は大本教が研究対象であった。私はこの研究ゼミナールに二十年程、毎年参加してきたことから、諸宗教の間に見られる類似性と独自性といったことに興味を持つようになった。そして、宗教の独自性というものは宗教の本質に係わる問題であると言うよりも、むしろそれを受止める人間の側にある問題ではないかと考えるようになってきた。殊にユダヤ教、イスラム教のゼミナールに参加したことから、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という三大宗教は何れも旧約聖書を母体としながら、夫々が独自の、ある意味では全く異なる（金光教、大本教等の間では全く異なるとは言えない）宗教となっている（少なくとも一般的な見地からは）ことに特別の関心をもつようになった。これらの三大宗教が旧約聖書を母体として派生した歴史的宗教であるということは、私にとって、旧約聖書は少なくとも三様のちがった解釈が宗教的には可能であった。ということの意味してくる。

このことは少しも不思議なことではなく、当然すぎる程に当然なことなのであるが、そのために私はこのことに含まれている意味の重大さに気付いて来なかったばかりか、その重大さを考えようともして来なかったのである。私はイ

スラーム教のゼミナールに参加したことから、イスラームの経典、クラー⁽²⁾ンを読み、イスラミック・センター・ジャパンが発行するイスラーム入門シリーズの幾冊かに注目し、更にH、コルバンの「イスラーム哲学史」にも興味をもつようになった。

このようなことから、先きに述べた、旧約聖書は少くとも三様のちがった解釈が宗教的には可能であった、ということが意味していることの重大さを考えるようになったのである。考えようによっては、これまでの自分の宗教への関心の在り方を恥じなければならないのであるが、どんなことを考えるようになったのかを、この小論に記してみたい。

(1)

ユダヤ教はキリスト教、イスラーム教という二大宗教を派生させる母体となった旧約聖書そのものを産み出した産みの親とも言うべき宗教である。旧約聖書はセム族の一種族ヘブル族が、神の選民イスラエルと呼ばれ、彼らの宗教、ユダヤ教を形成するに至った略二千年に亘る史的変遷の中で、記され、編纂された多様な記録の一大集成に他ならない。

先ずユダヤ教に就て、その要点となる所を簡単に記すると、出エジプト記19:1～6に“イスラエルの人々は、エジプトの地を出て後三月^{つきめ}目のその日に、シナイの荒野にはいった。すなわち彼らはレピデムを出立してシナイの荒野に入り、荒野に宿営した。イスラエルはその所で山の前に宿営した。さてモーゼが神のもとに登ると、主は山から彼を呼んで言われた、「このように、ヤコブの家に言い、イスラエルの人々に告げなさい、『あなたがたは、わたしがエジプトびとにした事と、あなたがたを鷲の翼に載せてわたしの所にこさせたことを見た。それで、あなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう』。これがあなたのイスラエルの人々に語るべき言葉である。」と記されている。

又申命記26:5～11には“そして、あなたは（モーゼのこと）あなたの神、主の前に述べて言わなければならない、『わたしの先祖は、さすらいの一アラ

ムびとでありましたが、わずかの人を連れてエジプトへ下って行って、その所に寄留し、ついにそこで大きく、強い、人数の多い国民になりました。ところがエジプトびとはわれわれをしえたげ、また悩まして、つらい労役を負わせましたが、われわれが先祖たちの神、主に叫んだので、主はわれわれの声を聞き、われわれの悩みと、骨折りと、しえたげとを顧み、主は強い手と、伸べた腕と、大いなる恐るべき事と、しるしと、不思議とをもって、われわれをエジプトから導き出し、われわれをこの所に連れてきて、乳と蜜の流れるこの地をわれわれに賜いました。主よ、ごらんください。あなたがわたしに賜った地の実の初物を、いま携えてきました』。そしてあなたはそれをあなたの神、主の前に置いて、あなたの神、主の前に礼拝し、あなたの神、主があなたとあなたの家とに賜ったすべての良い物をもって、レビびとおよびあなたのなかにいる寄留の他国人と共に喜び楽しまなければならない。”と記されている。

これらの二つの引用文は、主の導きが彼らにとってどのようなものであったのかをよく言いあらわしている。私はユダヤ教の特色をよりよく理解するために、もう一ヶ所を申命記から引用しておきたい。

“見よ、わたしは、きよう、命とさいわい、および死と災をあなたの前に置いた。すなわちわたしは、きよう、あなたにあなたの神、主を愛し、その道に歩み、その戒めと定めと、おきてとを守ることを命じる。それに従うならば、あなたは生きながらえ、その数は多くなるであろう。またあなたの神、主はあなたが行って取る地であなたを祝福されるであろう。しかし、もしあなたが心をそむけて聞き従わず、誘われて他の神々を拝み、それに仕えるならば、わたしは、きよう、あなたがたに告げる。あなたがたは、必ず滅びるであろう。あなたがたはヨルダンを渡り、はいつて行って取る地でながく命を保つことができないであろう。わたしは、きよう、天と地を呼んであなたがたに対する証人とする。わたしは命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならない。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。すなわちあなたの神、主を愛して、その声を聞き、主につき従わなければならない。そうすればあなたは命を得、かつ長く命を保つことができ、主が先祖「アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地に住むことができるであろう」。”（30：15～20）

この一文はイスラエルがモーセに率いられて四十年の間、荒野の苦難を経て漸く乳と蜜との流れる地を目前にした時に、モーセに与えられた主の言葉であると言われている。

父祖アブラハムに約束された地カナンを攻略したイスラエルが、どのような経過を経てダビデの時に王国を築き、エルサレムを首都とするに至ったのか、また、その王国が分裂し、首都エルサレムが破壊され、イスラエルが滅び去らねばならなかったかを、旧約聖書は具さに記している。彼らイスラエルの民の手に残されたものは、彼らと神との間に結ばれた契約のしるしである律法の遵守ということだけであった。この律法の遵守は、彼らが神の選民であることを象徴するものであり、夫故に、ユダヤ人がイスラエルの民と呼ばれる選民思想を持ち続ける限り、この律法は遵守し続けなければならないのである。ユダヤ教は今日に於てもそれを変えてはいない。

(2)

イスラエルの民はカナンの地を領有することに成功するのであるが、彼らが歩んだ道は、先に引用した「命と死および祝福とのろい」(申30:19)の波に翻弄される歴史の連続であった。それが律法の遵守を叫ぶ預言者たちに活躍の舞台を提供することになる。しかし、預言者たちの真摯な活躍にも拘らず、漸く建国された王国は崩壊の破局を免かれなかったのである。福音書を読む人は、イエスの宣教活動が律法の遵守に忠実であろうとする律法学者やパリサイ派の人々と鋭く対立していることに驚かされるにちがいない。

キリスト教は選民思想を中核とするユダヤ人の律法主義に終止符をうつことによって、ユダヤ教から派生した宗教であった。熱心なパリサイ人であったかつてのサウロ、今やキリスト信徒となったパウロは、“わたしは八日目に割礼を受けた者、イスラエルの民族に属する者、ベニヤミン族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法上ではパリサイ人、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については落ち度のない者である。しかし、わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。”(ピリピ人への手紙 3:5～7)と宣べ、ローマ人への手紙 10:2～4には“わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではな

い。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てように努め、神の義に従わなかったからである。キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。”と記している。更に、ガラテヤ人への手紙 3:1～3 には、“キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、「木にかけられる者は、すべてのろわれる」と書いてある。”と記している。パウロは、かつての熱心なユダヤ教徒であった時のことを省みて忸怩たるものがあつたのである。

他方福音書には、マタイによる福音書 5:20～21に、“わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思つてはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。よく言つておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるであろう。わたしは言つておく。あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはできない。”とイエス自身の言葉として記されている。上記の引用文の中に、イエス自身が、「わたしが律法や預言者（旧約聖書の教えることと意識してもよい）を廃するためにきたと思つてはならない。成就するためにきたのである」と語っている点が注目される。律法や預言者の活動に終止符をうったのはイエスではなかつた。イエスを「十字架につけよ」と叫んで止まなかつた群衆（27:11～26参照）であつたのである。福音記者は、イエスの口を通して「成就されなければならないもの」があるのだ、ということをおのこの一文で意味付けているのである。この成就されなければならないものがあるということがキリスト教を派生させているものなのだ、と言つてよいであろう。この点に就ては後述する所に多くのことをゆずり度い。旧約聖書はモーゼの五書と呼ばれている巻頭の律法書（旧約全体の22%強）と、王国の盛衰を記した歴史書並びに文学書（全体の31%強）と預言書（全体の46%弱）とから成立している。私は前項（1）の始めに「旧約聖書はセム族の一種族ヘブル族が神の選民イスラエルと呼ばれた彼らの宗教、ユダヤ教を形成するに至つた略二

千年に亘る史的変遷の中で、記され、編纂された多様な記録の一大集成に他ならない」と記したが、彼らの種族の中で選民イスラエルの資格を与えられなかった、言わば選民イスラエルから除外された種族もいたのである。例えばアブラハムとエジプトの女ハガルとの間に生れたイシマエル（創16：1～16）とか、イサクとリベカとの間に生れた双生児の兄にあたるエサウ（創25：1～34，24：34～27：42）がそれである。旧約聖書は彼らがどのような行状であったのかを詳しく記してはいないが、彼らはアラブの地に存続していたのである。

選民イスラエルの宗教であるユダヤ教は彼らを排除するという差別的な問題を残していた。この選民イスラエルから排除された非選民アラブがユダヤ教からキリスト教が派生した後ち約600年余りを経て派生したイスラーム教の中に含まれていることは注目されてよいだろう。

イスラーム教は、ユダヤ教が律法を根幹とする選民イスラエルの宗教であったのに対して、預言者の精神を根幹として派生した汎アラブを枢軸とする宗教であった。

私は「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教という三大宗教は何れもが旧約聖書を母体として派生した宗教である」と記したのであるが、このような記述の仕方は、実は極めて素人臭い記述の仕方であって、これらの宗教の独自性を害ないかねないものである。アンリ・コルバンの「イスラーム哲学史」はこの点を明確に定義しているので、その一部を照会しながらイスラームに就て述べて行きたい。

（3）

“イスラーム哲学はまず、啓典の民というクルアーン（クラーン）の表現によって特徴づけられるような、一つの宗教的共同社会に属する思想家たちの成果として規定される。⁽⁵⁾ ちなみに啓典の民とは聖典を所有する民を意味し、その宗教の成立が《天啓の》書、つまりとある予言者により啓示され、その予言者を通じて人々に教示された聖典に依存しているような民を指すのである。この啓典の民という言葉は、本来ユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムを指している。

これら共同社会はすべて、一つの共通の問題をかかえているが、それはこれ

らの社会が共有している基本的な宗教現象、つまり現世の生活の規範であり、来世への手引きとなる啓典の存在という現象に端を発している。終始一貫して払われる努力は、この啓典の真意を理解することなのである。だが理解の様式は、理解する者の存在の様式によって条件づけられる。また逆に信者のあらゆる内的態度は、彼の理解の様式に由来するものである。実際に体験される状況は、本質的に解釈学的状況、つまり信者に真の意味を開示し、それによって彼に真の実存をもたらすような状況なのである。この意味の真理とは存在の真理、つまり現実的な真理、真の現実と相関々係にあるものであり、哲学的な主要語の一つであるハキーカという言葉で表現される。

このハキーカという言葉は、他にも種々の用法があるが、とりわけ神的啓示の真の意味、つまりその真理でありながら同時にその本質であるような意味、したがってその精神的意味であるような意味を指している。それゆえ《天啓の聖典》という現象が独自の人間学、つまり一種独得の精神文化を含むものであり、したがってまたある種の哲学を要請し、同時にそれを刺激し、方向づけるということができるのである。精神的意味としての真の意味の追求がキリスト教において聖書編訳学に、イスラームにおいてクルアーン解釈学に課した諸問題の中には、たがいに相共通するものが存在する。だが同時に、両者の間には決定的な相違も認められる。このような類似点、相違性は、のちに構造的に分析解明されるであろう。

精神的意味の獲得を目的とするということは、前提として精神的意味とは異なる意味が存在すること、またこれらの両者の間にはおそらく段階的差異があり、この差異は精神的意味自体の複数性を要求する、といったことを暗黙のうちに認めることになる。したがってすべては独自の展望を与える視点を設定する意識の最初の行為と、この展望の法則でありつづけるような付帯的な法則にかかっている。意識自体に解釈学的な展望を与えるこの行為は、意識にたいしてそれが組織化する世界、階層的な存在構造をもつべき世界をも啓示する。このような点からすると、聖典の現象はキリスト教とイスラームに相共通する構造をもたらしていることになる。だがこれに反して、真の意味にたいする接近の仕方の相違に応じて、諸状況、諸困難はたがいに質を異にしているのである。”

以上の一文は言う迄もなくイスラーム哲学の立場からの聖典論であって、啓

典と聖典とを峻別している点が注目される。これはイスラームがイスラームの成立を預言者による啓示という天啓に基付かせているからであろう。恐らくキリスト教の立場からは、これ程の明確さをもって聖典を定義付けることは不可能に近い。コルバンは更に次のように記している。

“まず初めに留意すべき事柄は、イスラームにおける教会の不在であろう。イスラームの中には、《恩寵の仲介》をこととするただ一人の聖職者もいないばかりか、教義上の師父、教皇の権威、教義の裁定を行なう宗教会議なども存在しない。キリスト教においては二世紀以降、モンタヌス派（二世紀のキリスト教異端で、首唱者モンタヌスは自ら聖霊の預言者と称した）運動の鎮圧とともに、教会の教義上の師父が予言的啓示に、より一般的には自由な精神的解釈学にとって代ることになった。他方キリスト教的意識の開花と高揚は、著しい歴史意識の覚醒と向上とを告示している。キリスト教的思考は西暦元年に起った事実にもっぱら関心を注ぎ、神の受肉は歴史への神の参加を特徴づけているのである。その結果、宗教的意識は次第に関心を高めながら聖書の定義通りの意味と真の意味とを包含する歴史的意味を問題視するようになった。”

イスラームは預言者の宗教なのである。イスラーム入門シリーズNo. 8「イスラームの政治理論」⁽⁶⁾には“預言者の使命はイスラームを伝え、アッラーの教えを広め、この人間界の暗やみに神の光明を点すことである。これは人間が地球上に住みはじめてから、ムハンマドの登場に到るまで、引き続いて現われたすべての「神命をうけた預言者」の使命であった。実際に、すべての預言者の使命は、一致してイスラームを説くことであった。ムハンマドはその最後に列したのである。彼をもって預言者は終わり、彼に人間を導く最終の規約が、その最も完全な形で啓示されたのである。すべての預言者は啓示された指標を人類に伝え「神の絶対的主権を認識し、神に心から従う」ことを要求した。これが各々の預言者に与えられた使命であった。”と記されている。更に同じ頁に“預言者の長い歴史で、我々の心を最も強くうつのは、これらの使徒が『アッラーの他にイラーフ（信仰の対象）なし』”と宣言する時はいつでも、悪の力が一丸となって彼らに挑むことである。”と記している。

一般にキリスト教で預言者というのはイザヤ・エレミヤ等の大預言書、アモス・ミカ等の小預言書に名をとどめる預言者を指している。イスラームはキリ

スト教会が旧約聖書を聖典としているのと同じ意味で旧約聖書を聖典としているのではない。コルバンは ムハンマドは預言者たちの封印（最後の存在）であり、彼以前に人類に新たなシャリーア（神の掟）をもたらした預言者たち（⁽⁷⁾マダム、ノア、アブラハム、モーゼ、イエス）に続く最後の預言者なのであると記している。この引用で解るように、イスラームの聖典はクラーンだけが聖典であって、クラーンはキリスト教が旧約聖書に対して新約聖書を持ち、それをも聖典としているのと同じような意味での聖典ではなく、クラーンだけが唯一無二の聖典なのである。クラーンは、ムハンマド（かれの上に平安あれ）が、四十のときメッカ郊外の光明山頂にあるヒラの洞窟で、天使ガブリエルを通して初めて神の啓示を賜わり、それから逝去の年までの23年間（609—632AD）⁽⁸⁾にわたり啓示された、アルラーのことばの全部を編集したものであると説明されている。

「聖コラーンとハディース（預言者ムハンマドの言行録）⁽⁹⁾にはコラーンの意義と題して次のように説明している

“コラーンの基本的目的は、宇宙と人間世界における神の支配力への認識を、人々の心に呼び起こすことである。過去に存在したもの、現在あるもの、又は将来神が存在させるすべてのものは、神の支配から逃れることはできない。人間はこの広大な宇宙の中で、神の信託者にすぎないのであって、人間がこの世に創造された目的は、神を崇拝するためである。

神（アルラー）を崇拝することは、信仰の行をするために、日常生活の活動を止めることではない。我々の行為は、もし神の下された則に従って良い意志をもってなされたものであれば、それはすべて神の崇拝である。人間それぞれの究極の責任は、神へのものであって、人はすべて神の恵み、すなわち、生命そのもの、能力、才能、知識、時間、資産及び与えられたすべてのものを、いかように使ったかを問われよう。現世での命にはかぎりがあるが、この生命は来世では無限の生命が作られる基盤なのである。このように現世での生命は極めて重要なものであり、決してそれを無駄に費してはならない。

そこで、コラーンは人生の全分野にわたる基本原理を述べ、人間は神から期待されている生き方を教えられている。コラーンに盛り込まれているこれらの基本原理は、個人的人生についてだけでなく、人間と人間、集団と集団との関

係をすべて網羅している。現世でのすぐれた生き方は、来世での成功への必要条件である。それゆえコラーンは、真実のための真摯な観察、思索、調査及び追求、他人への奉仕、すべてに対する正義の追求、地球上のすべての人びとの平和を目的としたすぐれた行為と行動のために専念することを人びとに求めている。コラーンは、人間は地上での神の代権者であり、人はその事実に基づいて行動しなくてはならないと言う。コラーンは他人への隷属状態から自らを解放し、欲望を制御し、出生、財産、社会的地位や出身地などの虚栄にとらわれず、現世での神の代権者（カリフ）にふさわしい真の威厳と知恵を身につけるよう説いている。この最終目的を達成するためには、神の真実性への意識の奥底に深く刻み込まれなくてはならない。神への尊敬こそ、あらゆる善行の基本であるとコラーンは述べている。人間が神への認識を体得するために、神はイスラーム教徒に対して神への特別の畏敬の念を表明する行為、すなわち礼拝、斎戒、巡礼、及び喜捨を命じている。そしてこれらの務めは、我々人間の所有するすべてのものが神のためのものであり、又我々は神に帰依すべきものであることを、我々の心に呼び起すためのものである。

以上の引用文から考えられるように、イスラームは預言者の系列に基づく独自の宗教であり、旧約聖書も新約聖書もイスラームの立場から自家薬籠的に用いられる、コラーンを形ちづくっていることが注目される。ではイスラームはキリスト教をどのような目で見ていたのであろうか。

(4)

イスラミックセンターの刊行する小冊子に、ムハンマド・アサドの「宗教は過去のものか」と題する一冊がある。その中に“科学の進歩は人類に多くの新事実を提供する。しかしそれは人間の道徳的生活と直接の関係はもたない。

科学はたしかに人間の心理や、取り巻く環境をより深く理解するためには必要なものである。しかし森羅万象を分析し、その法則を見出そうとするだけでは、人間存在の目的（そのようなものがあるとして）を解明し、人間に道徳的自覚を与えることはできない。科学的思索をいかに深くめぐらしてみても、道徳の問題は科学の範囲には見つからない。それは宗教の領域にしかないのである。その正誤は別として、我々は宗教的経験を通して、日々の生活のなかから

道徳的規範と倫理的価値を見出してきたのであり、決して科学的知識によって認識してきたのではない。ここで「正誤は別として」と特に述べたのは、いかなる宗教でもその形而上の前提が間違っている可能性は十分に考えられることであり、その宗教を信じるか否かはつまるところ経験と理性にたよるしかないからである。またそれによってこそ人間は、特定の宗教がどの程度肉体的精神的な要求を満たしてくれるかを知ることができる。経験と理性を用いることは絶対必要ではあるが、人間の生活を意義あらしめるものは、あくまで宗教以外にはない。⁽¹⁰⁾ “最も広い意味での宗教的衝動というものは、人類発展の歴史のなかで過ぎ去って行くひとつの事象ではなく、また時代が乗り越えていく薄っぺらな軽信でもなく、倫理と道徳の永続的な原動力である。それはあらゆる時代と環境を通して、人間の基本的かつ真実の要求に対する唯一の回答であり、言い換えれば宗教的な衝動こそ人間の本能といえるであろう。⁽¹¹⁾”

と先ず第一に、現代の科学的時代に於ても、宗教の存続は絶対的なものでなければならぬことの根拠を明確にした後、今日の宗教の実状に就て、

“現代は人間の宗教心がきわめて衰微している時代である。……宗教人は「どうすれば宗教の理念にそって実生活を確立できる」かをまったく教えていない。そのため多くの形式的宗教は、実際の問題からかけ離れてしまう。

さらに社会的経済的見地からは、現代は混乱の時代であり、宗教者からの実⁽¹²⁾際的指導の欠落のために、世はまさに破滅の様相を呈している。……。”

“この社会と経済の混乱は、物質面のみにとどまらず、信仰の領域まで侵した。今では、政治と経済の基盤であった倫理と信仰に対して、広範囲の批判が起きている。特に昔からの慣習を無批判に固守してきた、今日の宗教指導者たちが、現代の困難の解決にまったく無策である限り、当然起こるべく起きた混乱であろう。現代社会での深刻な不安は、倫理面での荒廃を片割れとして悪循環を繰り返している⁽¹³⁾と述べている。

著者のムハンマド・アサドは“このことはイスラームの世界にもあてはまる。……本来のイスラームに戻ろうというスローガンにもかかわらず、イスラームの教えを生活の原理として適用しようとする者の数は、きわめて少ないのが現実である”とイスラームの現状を是認した後、⁽¹⁴⁾ “キリスト教は誤りを犯し、失敗しているのである。それは人生の現実的な面、すなわち肉体生活、肉体的

要求と願望、経済と政治などから、キリスト教そのものを遊離させてきたからである。キリスト教では、「神のもの」（すなわち倫理と道德）と「皇帝のもの」（すなわち政府、経済および社会組織の分野）との間に、はっきりと境界線を引いてきた。それは現去での「自然な生活」を悪とみなし、「超自然の靈性」との間には越えられない溝があると主張する教義の倫理的矛盾であろう。

キリスト教神学は、「精神」と「物質」を本質的に相反する実体としてとらえている。その考え方は、「物質」を悪の領域に入れ、「物質」への愛着は悪への愛着と同義であるとみなしている。それゆえキリスト教でいう「贖罪」とは、物質への欲望の罣から自分自身を解放し、「原罪」と呼ばれる行為によって墮落した人間が、元の理想の姿に戻ろうと努力することを条件としている。”

⁽¹⁴⁾と述べ、更に“しかし、当然のことであるが教会は不可能を可能にはできなかった。人間生活から「性の衝動」を排除することはできなかったし、「物質」を「邪悪」と見なしたにもかかわらず、人間の世俗的かつ自然な興味や、「物質」面での進歩に対する願望を抑制することはできなかった。

中世の初期、一つの妥協が行なわれた。教会は人間の世俗的な欲望を「必要悪」である、ということに暗黙の了解を与えた。そして人々はあえて宗教に反対する必要はなく、ただ宗教理念と現実とを区別すればよしとした。このように教会は、人間生活の実際的現実的側面（すなわち教会が征服できず、認めざるを得なかったもの）を宗教の領域外に追いやることによって、指導範囲を縮小させながら、人々に対する影響の一部だけでも守ろうとした。そこではじめて、宗教とは人生のごく一部にすぎず、生活のほとんどは宗教とまったく関係がないという、西欧の代表的考え方を生み出したのである。⁽¹⁵⁾……………。

キリスト教と異なった宗教理念の下で育ってきたムスリム達にとって、実際問題から離れた倫理が存在するという考え方は、まったく不思議に聞こえるに違いない。現在見られる西洋文明の崩壊現象は、キリスト教が押し進めてきた、この非現実的な二元論に本質的な原因を求めることができる。千五百年以上もの永い年月にわたって、西洋の倫理と道德を培ってきた考え方は、すべてキリスト教から派生したものである。⁽¹⁶⁾……………。

実際効果のない、説教に閉じこもった宗教。社会的公正の樹立のためには何の貢献することのない教会。信仰の形、教義と超越的な希望は持つが、個人

や社会生活についての積極的な綱領をもたなぬ宗教。

教会がしばしば虐待や搾取に力を貸し、弱者を護らず、権力者にとって有益な社会組織を守ることに奔走したことを、人々は良く覚えている。多くのヨーロッパ人は、宗教の名のもとで、再び武力と虐待の暗黒が再現されるのではないか、という恐怖を抱いている。そして「宗教」という名が、不安の代名詞となりつつある今日である。⁽¹⁷⁾と論じている。

そして結論として“理解の困難な、あるいは理解不可能でさえある教義上の主張（例えば三位一体の教義とか、身代り贖罪の教義）を持つキリスト教には、多くの精神的絶対論があることは疑いないが、イスラームの教義の中にはその種のものは何も見出すことはできない。反対にイスラームの倫理概念のすべては常識に訴える力にもとづいている。……「宗教」は過去のものである」という叫びは、その最も深い部分において、西欧社会の叫びである。⁽¹⁸⁾と結んでいる。

(5)

私は、このムハンマド・アサドの「宗教は過去のものか」、を読み乍ら、不図こんな空想を逞しくしはじめたのである。

イスラエルの歴史がモーセによるエジプト脱出から、ダビデ王によるイスラエル国家の統一、そして首都エルサレムの制定、ソロモンの神殿建設までは、聖書に記されているように、そのまゝ進められるが、それ以後に起った王国の分裂といった不祥事は起らないで、イスラエル王国がそのまま継承されていたと仮定した場合、イスラエルの宗教はどんな形のものになったであろうか、という想定なのである。

その場合、旧約聖書は、勿論、今日のものとは全くちがった形のものになっていたであろうし、強いて推定するならば、わが国の日本書紀、古事記、出雲風土記のような類いのイスラエル版が、あるいは、書き残されていたかもしれない。そして、その場合キリスト教は言うまでもなく、恐らくイスラーム教も派生することにはならなかったであろう。

こんな想定を恣にしてみると、イスラエルの歴史を現実の形のものにつくりあげたものは、アツシリヤ、バビロニヤ、ペルシャ、マケドニヤ、ローマ等々の強大な諸外国のパレスチナ侵略であり、征覇であり、それがイスラエルの国

民に及ぼした緊張関係、即ちインパクトであったことが考えられてくる。この緊張関係は決して単純なものではない。一般大衆のもった緊張関係、政治的指導者の持った緊張関係、宗教的指導者のもった緊張関係夫々がみなちがったものであった。これらの緊張関係から出て来たものが彼らの宗教性であり、非宗教性であった。また愛国心であり、非愛国心であった。それを今日私たちは大小の預言書を通して読みとることが出来るのである。旧約聖書そのものを書き残させ、編纂させたものもこれらの緊張関係から出たものであったと言ってよいであろう。

このように考えてみると、旧約聖書を生み出させた緊張関係は將にイスラエル特有の歴史的風土的な特異性からのものであり、独自性をもったものであったのだと言ってもよい。“聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である”(テモテへの第二の手紙 3:16) と記されている通りのものであったのであろう。

夫故、聖書は、これを書き残した人々が感得した、歴史的風土的インパクトを無視して解釈することは、解釈者の独自性（あるいは主観と言ってもよい）に汚染される危険性を含んでいると言えるかもしれない。解釈の多様性は宗教的真理への純化ということに対しては逆行することになる。

私はイスラームのものを（極く少数のものではあるが）読みながら、一般にキリスト教は西欧的宗教であるとか、西欧的キリスト教であると言われている言葉の中に、この種の汚染の問題が存在しているように思えて来た。このような汚染がキリスト教本来の真の姿を歪め、キリスト教の真理（あるいはキリスト教が示している生きることへの真実さ）を曲解させているのであろう。聖書の解釈は、コルバンの言葉に従うなら、「だが、理解の様式は、理解する者の存在の様式によって条件づけられる」ということを免れ得ないかもしれない。そうであるとすれば「信者に真の意味を開示し、それによって真の実存をもたらすような状況」はどのようにしてもたせられるのであろうか。正直に言って、私にはむずかしすぎて解らないと言うより他はない。しかし、上に述べたインパクトという問題を基礎にして、キリスト教の独自性を追求することは無駄な努力ではないであろう。

次の項に記すこの独自性の追求は一つの試みなのである。

(6)

聖書は旧約、新約を通して、ある画期的な出来事を示すのに、聖書特有の記述の仕方をしているように思える。その一つは不妊の女が懐妊したことに係わる記事であり、他の一つは王による嬰兒の殺戮に係わる記事である。

(1) ルカによる福音書は、イエスの先駆者となった洗礼者ヨハネの出生に就て、
“ユダヤの王ヘロデの世に、アビヤの組の祭司で名をザカリヤという者がいた。その妻はアロン家の娘のひとりで、名をエリザベツといった。主の戒めと定めとを、みな落度なく行っていた。ところが、エリザベツは不妊の女であったため、彼らには子がなく、そしてふたりともすでに年老いていた。”(1:5～7) “御使が彼に言った、「恐れるな、ザカリヤよ、あなたの祈が聞きいれたのだ。あなたの妻エリザベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけなさい”(13～14)。“するとザカリヤは御使に言った、「どうしてそんな事が、わたしにわかるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています」。御使が答えて言った、「わたしは神のみまえに立つガブリエルであって、この喜ばしい知らせをあなたに語り伝えるために、つかわされたものである。時が来れば成就するわたしの言葉を信じなかったから、あなたはおしになり、この事の起る日まで、ものが言えなくなる」”(18～20)。さて、エリザベツは月が満ちて、男の子を産んだ。……八日目になったので、幼な子に割礼をするために人々がきて、父の名にちなんでザカリヤという名にしようとした。ところが、母親は「いいえ、ヨハネという名にしなくてははいけません」と言った。人々は「あなたの親族の中には、そういう名のついた者は、ひとりもいません」と彼に言った。そうして父親に、どんな名にしたいのですかと、合図で尋ねた。ザカリヤは書板を持ってこさせて、それに「その名はヨハネ」と書いたので、みんなの者は不思議に思った。すると、立ちどころにザカリヤの口が開けて舌がゆるみ、語り出して神をほめたたえた。”(57, 59～64)と記している。そして次の67～79にはザカリヤの預言が記されている。

(2) サムエル記上にはイスラエルの歴史に画期的な時代を画くす王制の先駆者サムエルの出生に就て、

“エフライムの山地のラマタイム・ゾピムに、エルカナという名の人があった。エフライムびとで、エロハムの子であった。……。エルカナにはふたり

の妻があって、ひとりの名はハンナといい、ひとりの名はペニンナといった。ペニンナには子どもがあったが、ハンナには子どもがなかった。この人は年ごとに、その町からシロに上って行って、万軍の主を拝し、主に犠牲をささげるのを常とした。シロにはエリのふたりの子、ホフニとピネハスとがいて、主に仕える祭司であった。エルカナは、犠牲をささげる日、妻ペニンナとそのむすこ娘にはみな、その分け前を与えた。エルカナはハンナを愛していたが、彼女には、ただ一つの分け前を与えるだけであった。主がその胎を閉ざされたからである。また彼女を憎んでいる他の妻は、ひどく彼女を悩まして、主がその胎を閉ざされたことを恨ませようとした(1: 1～6)。” “ハンナは心に深く悲しみ、主に祈って、はげしく泣いた。そして誓いを立てて言った、「万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ、わたしを覚え、はしためを忘れずに、はしために男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません」(1: 10～11)。” …… はしためを、悪い女と思わないでください。積る憂いと悩みのゆえに、わたしは今まで物を言っていたのです」。そこでエリは答えた、「安心して行きなさい。どうかイスラエルの神があなたの求める願いを聞きとどけられるように」。彼女は言った、「どうぞ、はしためにも、あなたの前に恵みを得させてください」(17～18a)。彼らは朝早く起きて、主の前に礼拝し、そして、ラマにある家に帰って行った。エルカナは妻ハンナを知り、主が彼女を顧みられたので、彼女はみごもり、その時が巡って来て、男の子を産み、「わたしがこの子を主に求めたからだ」といって、その名をサムエルと名づけた。(19～20)” と記されていて、第2章にはハンナの祈りが附記されている。

(3) 土師記にはペリシテびとの手からイスラエルを救い始めるサムソンの出生に就て、

“ここにダンびとの氏族の者で、名をマノアというゾラの人があった。その妻はうまずめで、子を産んだことがなかった。主の使がその女に現れて言った、「あなたはうまずめで、子を産んだことはありません。しかし、あなたは身ごもって男の子を産むでしょう。それであなたは気をつけて、ぶどう酒または濃い酒を飲んではいけません。またすべて汚れたものを食べてはいけません。あなたは身ごもって男の子を産むでしょう。また頭にかみそりをあててはいなりま

せん。その子は生れた時から神にささげられたナジルびとです。彼はペリシテびとの手からイスラエルを救い始めるでしょう」。そこでその女はきて夫に言った、「神の人がわたしのところにきました。その顔かたちは神の使の顔かたちのようで、たいそう恐ろしゅうございました。あなたはその人が、どこから来たのか尋ねませんでした、その人もわたしに名を告げませんでした（13：2～6）。……そこでマノアは主に願い求めて言った、「ああ、主よ、どうぞ、あなたがさきにつかわされた神の人をもう一度わたしたちに臨ませて、わたしたちがその生れる子になすべきことを教えさせてください」（8）。……主の使はマノアに言った、「わたしがさきに女に言ったことは皆、守らせなければなりません（13）。……マノアは主の使に言った、「あなたの名はなんといいますか。あなたの言われた事が事実となったとき、わたしたちはあなたをあがめましょう」。主の使は彼に言った、「わたしたちの名は不思議です。どうしてあなたはそれをたずねるのですか」（17～18）。……やがて女は男の子を産んで、その名をサムソンと呼んだ。その子は成長し、主は彼を恵まれた。（24）と記している。しかし、どうしたことかこの物語りにはマノアの妻の名が記されていない。

（4）創世記にはイスラエルの十二支族の救い手となったヨセフの母ラケルと、イスラエルの父祖アブラハムの世継となるイサクの母サラとが共に不妊の女であったと記している。

（a）“ラケルは自分がヤコブに子を産まないのを知った時、姉をねたんでヤコブに言った、「わたしに子どもをください。さもないと、わたしは死にます」。ヤコブはラケルに向かい怒って言った、「あなたの胎に子どもをやどらせないのは神です。わたしが神に代ることができようか」。ラケルは言った、「わたしのつかえめビルハがいます。彼女の所におはいりなさい。彼女が子を産んで、わたしのひざに置きます。そうすれば、わたしもまた彼女によって子を持つでしょう。ラケルはつかえめビルハを彼に与えて、妻とさせたので、ヤコブは彼女の所にはいった。ビルハは、みごもってヤコブに子を産んだ。そこでラケルは、「神はわたしの訴えに答え、またわたしの声を聞いて、わたしに子を賜わった」と言って、名をダンと名づけた。ラケルのつかえめビルハはまたみごもって第二の子をヤコブに産んだ。そこでラケルは、「わたしは激しい争

いで、姉と争って勝った」と言って、名をナクタリと名づけた(30:1～8)。……次に神はラケルを心にとめられ、彼女の願いを聞き、その胎を開かれたので彼女は、みごもって男の子を産み、「神はわたしの恥をすすいでくださった」と言って、名をヨセフと名づけ、「主がわたしに、なおひとりの子を加えられるように」と言った(22～24)。” ラケルが「なおひとりの子を」と言った子はヤコブがハランでの長い年月に終りを告げ父イサクの許に帰る旅路での出産であった。“こうして彼らはベテルを立ったが、エフラタに行きつくまでに、なお隔たりのある所でラケルは産気づき、その産は重かった。その難産に当って、産婆は彼女に言った、「心配することはありません。今度も男の子です」。彼女は死にのぞみ、魂の去ろうとする時、子の名をベノニと呼んだ。しかし、父はこれをベニヤミンと名づけた。ラケルは死んでエフラタ、すなわちベツレヘムの道に葬られた(35:16～19)。”と記されている。

新しい意味をもったイスラエルの祖となるイエスの誕生がベツレヘムであることとイスラエルの生みの親ラケルの死との間に何かの関係があるのかと考えたくなる記述で終わっている。

(6) 創世記に記されているもう一つの記事は“アブラムの九十九歳の時、主はアブラムに現れて言われた、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。わたしはあなたと契約を結び、大いにあなたの子孫を増すであろう」。アブラムは、ひれ伏した。神はまた彼に言われた、「わたしはあなたと契約を結が。あなたは多くの国民の父となるであろう。あなたの名は、もはやアブラムとは言わず、あなたの名はアブラハムと呼ばれるであろう。わたしはあなたを多くの国民の父とするからである。”(17:1～5)と記されているのだが、アブラハムには世継となる息子がいなかったのである。

アブラムの妻サライは子を産まなかった。彼女にひとりのつかえめがあった。エジプトの女で名をハガルといった。サライはアブラムに言った、「主はわたしに子をお授けになりません。どうぞ、わたしのつかえめの所におはいりください。彼女によってわたしは子をもつことになるでしょう」。アブラムはサライの言葉を聞きいれた。アブラムの妻サライはそのつかえめエジプトの女ハガルをとって、夫アブラムに妻として与えた。これはアブラムがカナンの地に十年住んだ後のことであった。”(16:1～3)

だが、これによってすべてが解決されたのではない。“彼はハガルの所にはいり、ハガルは子をはらんだ。彼女は自分のはらんだのを見て、女主人を見下げるようになった。そこでサライはアブラムに言った、「わたしが受けた害はあなたの責任です。わたしのつかえめをあなたのふところに与えたのに、彼女は自分のはらんだのを見て、わたしを見下げます。どうか、主があなたとわたしの間をおさばきになるように」（4～5）と。そのために、ハガルはサライの顔を避けてシユルの野に逃れなければならなかった。そこで“ハガルはアブラムに男の子を産んだ。アブラムはハガルが産んだ子の名をイシマエルと名づけた。ハガルがイシマエルをアブラムに産んだ時、アブラムは八十六歳であった”（15～16）と記している。

17章には、前掲の神とアブラムとの契約のしるしとして“神はまたアブラムに言われた、「あなたと後の子孫とは共に代々わたしの契約を守らなければならない。あなたがたのうち、男子はみな割礼をうけなければならない。これはわたしとあなたがたの守るべきものである。……それがわたしとあなたがたの間の契約のしるしとなるであろう」（9～11）。“この日アブラハムとその子イシマエルは割礼を受けた（26）と記している。アブラハムはその時九十九歳、イシマエルは十三歳であった（17:24～25）。これらの記事からは、ハガルとイシマエルが何時の間にかシユルの野からアブラハムの許に戻って来てサラとの間にも平和な生活が営まれていたように推測される。だが決定的な事態が再び起って来る。

不妊の妻サライに就ての記事を辿ってみると、“神はまたアブラハムに言われた、「あなたの妻サライは、もはや名をサライといわず、名をサラと言いなさい。わたしは彼女を祝福し、また彼女によって、あなたにひとりの男の子を授けよう。わたしは彼女を祝福し、彼女を国民の民の母としよう。彼女から、もろもろの民の王たちが出るであろう」。アブラハムはひれ伏して笑い。心の中で言った、「百歳の者にどうして子が生れよう。サラはまた九十歳にもなって、どうして産むことができようか」。そしてアブラハムは神に言った、「どうかイシマエルがあなたの前に生きながらえますように」。神は言われた、「いや、あなたの妻サラはあなたに男の子を産むでしよう。名をイサクと名づけなさい。わたしは彼と契約を立てて、後の子孫のために永遠の契約としよう”

(17:15～19)。

“さてアブラハムとサラとは年がすすみ、老人となり、サラは女の月のものが、すでに止まっていた。それでサラは心の中で笑って言った。「わたしは衰え、主人もまた老人であるのに、わたしに楽しみなどありえようか」。主はアブラハムに言われた、「なぜサラは、わたしは老人であるのに、どうして子を産むことができようかと言って笑ったのか。主にとって不可能なことがあります。来年の春、定めの際に、わたしはあなたの所に帰ってきます。その時サラには男の子が生れているでしょう」。サラは恐れたので、これを打ち消して言った、「わたしは笑いません」。主は言われた「いや、あなたは笑いました」。(18:11～14)。

“主は、さきに言われたようにサラを顧み、告げられたようにサラに行われた。サラはみごもり、神がアブラハムに告げられた時になって、年老いたアブラハムに男の子を産んだ。アブラハムは生れた子、サラが産んだ男の子の名をイサクと名づけた。……アブラハムはその子イサクが生れた時百歳であった。そしてサラは言った、「神はわたしを笑わせてくださった。聞く者は皆わたしのことで笑うでしょう。また言った、「サラが子に乳を飲ませるだろうと、だれがアブラハムに言い得たであろう。それなのに、わたしは彼が年をとってから、子を産んだ」”(21:1～7)。アブラハムには既に世継となるべき長子イシマエルがいたのである。正妻サラの子イサクはどうなるのか？

“さて、おさなごは育って乳離れした。イサクが乳離れした日にアブラハムは盛んなふるまいを設けた。サラはエジプトの女ハガルのアブラハムに産んだ子が、自分の子イサクと遊ぶのを見て、アブラハムに言った。「このはしためとその子を追い出してください。このはしための子はわたしの子イサクと共に、世継となるべき者ではありません」。この事で、アブラハムはその子のために非常に心配した。神はアブラハムに言われた、「あのわらべのため、またあなたのはしためのために心配することはない。サラがあなたに言うことはすべて聞きいれなさい。イサクに生れる者が、あなたの子孫と唱えられるからです。しかし、はしための子もあなたの子ですから、これも一つの国民とします」(21:8～13)。……“神はわらべと共にいまし、わらべは成長した。彼は荒野に住んで弓を射る者となった。彼はパランの荒野に住んだ。母は彼のために

エジプトの国から妻を迎えた”（20～21）と記している。

イシマエルは独立した成人になったのである。しかし、それでイシマエルとイサクとの関係が断絶したというわけではないらしい。25：7～10には父アブラハムの死去の時の模様が記されている。“その子イサクとイシマエルは彼をヘテびととゾハルの子エフロンの畑にあるマクベラのほら穴に葬った”と両者がアブラハムの葬儀には同席したことを記している。

しかしイシマエルに就て創世記が記している興味深い記事は、長子の権を失ったイサクの子エサウがイシマエルの娘と結婚していることである。“さてエサウは、イサクがヤコブを祝福して、パダンアラムにつかわし、そこから妻をめとらせようとしたこと、彼を祝福し、命じて「あなたはカナンの娘を妻にめとってはならない」と言ったこと、そしてヤコブが父母の言葉に従って、パダンアラムへ行ったことを知ったとき、彼はカナンの娘が父イサクの心になわな⁽¹⁹⁾いのを見た。そこでエサウはイシマエルの所に行き、すでにある妻たちのほかにアブラハムの子イシマエルの娘でネバヨテの妹マハラテを妻にめとった”（28：6～9）と記している。

又アブラハムに就ても興味をそそられる記事がある。25：1～2に“アブラハムは再び妻をめとった。名をケトラという。彼女はジムラン、ヨクシャン、メダン、ミデアン、イシバクおよびシュワを産んだ。と記している。23：1には“サラの一生は百二十七年であった。これがサラの生きながらえた年である”とあるから、サラが死んだ時アブラハムは137歳になっていた筈である。すると17：17の「アブラハムはひれ伏して笑い、心の中で言った、「百歳の者にどうして子が生れよう」という記事はどう理解したらよいのだろうか。アブラハムが死んだのは175歳の時であるから（25：7）サラが死んだ後三十八年間に実に六人の子を持ったことになる。所が歴代志上1：32には“アブラハムのそばめケトラの子孫は”と記している。この記事の方が正しいとすればアブラハムはサラの他にハガルと側妻ケトラがいたのだと解する方が常識的かもしれない。

以上の引用記事にどれ程の信憑性を持ち得るか私には解らないが、エリザベツ、ハンナ、マノアの妻、ラケル、サラと不妊の女の物語を遡って辿って行くと、上に述べて来たように、これらの女をめぐる状況は次第に複雑化されていることに気付く。単に複雑化されていることだけではなく、その記述には宗教

性が次第に稀薄になっている。サラの記事には全くと言ってよい程に宗教性が認められない。これに反して、ハンナの場合、エルカナのもう一人の妻ベニンナには息子と娘とがあるのに、ベニンナはハンナをひどく悩まして主がその胎を閉ざされたことを恨ませようとして彼女を悩ませ、そのためにハンナは食べることもしなかった、と記している（1：6～7）。

しかし、ハンナは、ベニンナの意地悪に少しも煩わされず、「どうぞ、はしのためにも、あなたの前に恵みを得させて下さい」（1：18）と祈っている。いじらしい程の素直さが伺われるのである。

エリザベツの場合は、自分の事を余り語ってはいない。Lk 1：24に“そののち、妻エリサベツはみごもり、五ヶ月のあいだ引きこもっていたが、「主は、今わたしを心にかけてくださって、人々の間からわたしの恥を取り除くために、こうしてくださいました」と言った。”と記されているだけである。しかし、エリザベツの懐妊は処女マリアの懐妊の予表となっている点が注目される。

“御使がマリアのところにきて言った、「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられます」。この言葉にマリアはひどく胸騒ぎがして、このあいさつはなんの事であろうかと思いめぐらしていた。すると御使が言った、「恐れるな、マリアよ、あなたは神から恵みをいただいているのです。見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい…。」そこでマリアは御使に言った、「どうして、そんな事があり得ましようか。わたしにはまだ夫がありませんのに」。御使が答えて言った、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子と、となえられるでしょう。あなたの親族エリザベツも老年ながら子を宿しています。不妊の女といわれていたのに、はや六ヶ月になっています。神にはなんでもできないことはありません」（1：28～37）。これらの記事はバプテスマのヨハネがイエスの先駆者であったと同じように、エリザベツはマリアの先駆者（マリアが聖霊によって懐妊することの）として画かれているとも考えられる。

言うまでもなく、ルカによる福音書とサムエル記、土師記、創世記との間には長い年月の隔りがあり、記者は全くの別人なのである。それなのに、このように不妊の女ということで記されている記事を抜き出して読み比べてみると、

この不妊ということは偶然の一致なのか、それとも不妊という女性にとってはその存在を問われるような問題を通して、「生れ出る者」を意味付ける何かを、この言葉に含ませているのか、と言った疑問が出てくる。そして、もしも、この言葉によって意味付けられている何か、があるのだとすれば、その意味付けられている何かとは何なのか、という疑問にまで広がってくる。

もしも、これらの記事を通して、聖書そのものが宗教的な進化とは何を意味することなのかを読者に考えさせようとしているのだとすれば、聖書はこれを縦に読む読み方もある、ということになろう。そして、この縦に読む読み方というのは、宗教的真理の発展の問題として、神の啓示は宗教的理念の進化という形でも考えられるということにもなる。

(7)

福音記者ルカは、イエスのエルサレム入城を画くのに“いよいよ都の近くに来て、それが見えたとき、そのために泣いて言われた、「もしおまえも、この日、平和をもたらす道を知っていたら、……しかし、それは今おまえの目に隠されている。……それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである”(19:41～44)。と記し、イエスの処刑への途上を画くのに、“大ぜいの民衆と、悲しみ嘆いてやまない女たちの群れとが、イエスに従って行った。イエスは女たちの方に振りむいて言われた、「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな、むしろ、あなたがた自身のため、また自分の子供たちのために泣くがよい。『不妊の女と子を産まなかった胎と、ふくませなかった乳房とは、さいわいだ』と言う日が、いまに来る。そのとき、人々は山にむかって、われわれの上に倒れかかれと言い、また丘にむかって、われわれにおおいかぶされと言い出すであろう。もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう”(23:27～31)と記している。

これらの記事は、どのように受けとめ、解釈したならばよいのか？ 前項(6)の結びとして、私は「神の啓示は宗教的理念の進化という形でも考えられることになろう」と記したのであるが、その事が一般の人々には考えられないことを、これらの記事は示していると、私には思えてならない。キリストの福音とは何なのかがこの点で考えられて来なければならないであろう。

このキリストの福音とは何なのかを考えるようになったかつてのサウロ、今やキリストを救い主と信じるパウロは、“律法の下にとどまっていたと思う人たちよ。わたしに答えなさい。……アブラハムにふたりの子があったが、一人は女奴隷から、一人は自由の女から生れた。女奴隷の子は肉によって生れたのであり、自由の女の子は約束によって生れたのであった。さて、この物語は比喻としてみられる。すなわち、この女たちは二つの契約をさす。その一人はシナイ山から出て、奴隷となる者を産む。ハガルがそれである。ハガルといえば、アラビヤではシナイ山のことで、今のエルサレムに当る。なぜなら、それは子たちと共に、奴隷となっているからである。しかし、上なるエルサレムは、自由の女であって、わたしたちの母をさす。すなわち、こう書いてある。

「喜べ、不妊の女よ。

声をあげて喜べ、産みの苦しみを知らない女よ。

ひとり者となっている女は多くの子を産み、その数は、夫のある女の子らよりも多い⁽²⁰⁾」”(ガラテリヤ 4 : 21～27)

と記しているのである。

この一文は、不妊の女の問題を比喻として解釈していることを示していると言っている。

(8)

もう一つの問題である王による嬰兒殺戮の記事は

(1) イエスの降誕を物語っているマタイによる福音書には、ヘロデ王が東の国の博士たちにだまされたと知った時、

“博士たちから確かめた時に基いて、ベツレヘムとその附近の地方とにいる二才以下の男子を、ことごとく殺した。”(1: 16) しかし、“主の使が夢でヨセフに現れて言った、「立って、幼な子とその母を連れて、エジプトに逃げなさい。そして、あなたに知らせるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが幼な子を捜し出して、殺そうとしている」”(1: 13) と記されている。

夢の中でヨセフに現われた主の御使の言葉に従って、イエスはこの暴君ヘロデの難を免れているのである。

(2) モーセの出世を物語っている出エジプト記はエジプトの王パロが生れてくる男の子を圧殺させたことを記している。ヨセフの頃にエジプトに寄留したイスラエルの民が次第に殖えてその数を増し、強大化するのを恐れたパロは彼らに重い労役を課して苦しめるのであるがイスラエルの民はいよいよ殖えるばかりなのに恐れをなし、ヘブルの女のために取り上げをする助産婦たちにさとして、言った、

“「ヘブルの女のために助産をするとき、産台の上を見て、もし男の子ならばそれを殺し、女の子ならば生かしておきなさい。」（1：16）と命じる。しかし助産婦たちは神をおそれ、エジプトの王が彼らに命じたようにはせず、男の子を生かしておいたのである。モーセはこの男の子の中にいた。そして、

“三月のあいだ隠していた。しかし、もう隠しきれなくなったので、パピルスで編んだかごを取り、それにアスファルトと樹脂とを塗って、子をその中に入れ、これをナイル川の岸の葦の中においた”（2：2～3）ののだが、幼な子はパロの娘に助けられ、成長するのである。

“彼女はその名をモーセと名づけて言った「水の中からわたしが引き出したからです」（2：10）と記されている。

パロの嬰兒圧殺の難を免かれたモーセはエジプト王の奴隷と化してしまったイスラエルの解放者となり、ヘロデの嬰兒虐殺の難を免かれたイエスは罪の奴隷と化してしまったイスラエルの解放者となったのである。この二つの記事には奇妙な類似性がある。これも偶然の一致なのだろうか、それともこの類似性には意味付けられている何かが含まれているのだろうか。

この世界には数え切れない程の人間が生まれ、また殺されて来た。戦争の歴史は嬰兒の殺戮どころではない大量の殺人が行われて来たことを教えてくれる。王による嬰兒殺戮の物語が殺人に係わる問題であるとすれば、不妊の女の物語はその反対であり、どんな人間を生み出すかの問題なのである。両者は将に相反する対照的な関係がある。生と死の問題は人間存在の在り方の問題でもある。

このような観点に立って考えてみると、創世記の記述の運び方とヨハネ福音書の記述の運び方にも一種の類似性が認められてくる。創世記はプロローグと考えられる1：1～2：4 aを除くと、アダムとエバの物語を記している。こ

の物語の結論と思われる 3: 14～19には、人間は生れ、そして死んで行く存在であり、その性の営みがどんな営みであるかを記している。

“主なる神はへびに言われた

「おまえは、この事をしたのですべての家畜、野のすべての獣のうち、最もものろわれる。

おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであろう。

わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。

彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」。

つぎに女に言われた

「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。

あなたは苦しんで子を産む。

それでもなお、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう」。

更に人に言われた

「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、世はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。

地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。

あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。

あなたは、ちりだから、ちりに帰る」と。

社会的存在である人間は、仮令夫婦の間柄でも、嫉妬と復讐に苦しめられ（創 4: 1～24）、暴君に悩まされ（6: 1～5）、不一致が分裂を生む（11: 1～9）ことを絶えず経験させられている。創世記はそれを神話の型で記しているのであろう。

夫故、旧約の詩人は

なんじ我らの不義を御前におき、

われわれの隠れたる罪を御顔の光のなかにおきたまえり。

我らのもろもろの日はなんじの怒りのもとに過ぎ去り、我らがすべての年

の尽くるはひと息のごとし。

我らが世にあるは七十年にすぎず、あるいは健やかにして八十年にいたらん。されどその誇るところは、ただ悩みと悲しみとのみ、この去りゆくことすみやかにして我らもまた飛び去るなり。

なんじの怒りの力を知るものはたれぞ、なんじをかしこみ恐れ、その憤りを知るものはたれぞ。

願わくは我らにおのが日をかぞえることをおしえて、

知恵の心を得しめたまえ”（詩90：5～12、日本聖公会祈祷書による）

と歌ったのであろう。

他方ヨハネによる福音書は、これもまたプロローグと考えられる 1：1～51を除くと、次にはガリラヤのカナで行われた婚礼の席でイエスが行った最初の奇蹟物語を記している。⁽²¹⁾（2：1～11）。この奇蹟の物語はへびの言分に幻惑されたアダムとエバの物語とは将に対照的な物語であると言ってよい。福音記者ヨハネは独自の見解をもって、この奇蹟物語を土台にして“イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行い、その栄光を現された。そして弟子たちはイエスを信じた。”と記し、次のvs. 13～22には、イエスが行った一大狼籍、エルサレム神殿の粛清の記事を記している。

もしも婚礼がアダムとエバの人生への出発点であるのであれば、「おのが日をかぞえることを教えられる知恵」が必要なのである。このために、福音記者は旧約から新約への信仰の在り方の変革が行われなければならないことを、この神殿粛清の記事をもって記しているのであろう。

夫故、福音記者は“多くの人々は、その行われたしるしを見て、イエスの名を信じた。しかしイエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。それは、すべての人を知っておられ、また人についてあかしする者を、必要とされなかったからである。それは、ご自身人の心の中にあることを知っておられたからである”（2：23b～25）と説明を加えているのであろう。

そして、この信仰の在り方の変革は“だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない”（3：3）と密かにイエスの許を訪れたユダヤ人の指導者ニコデモの質問にイエスは答えられたのである。

このイエスの答はニコデモを驚かせる。夫故福音記者は更に“神が御子を世

につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである”(3:17)と説明している。

ヨハネ福音書は、しかし乍ら、この言葉を第9章の生れ乍らの盲人の物語の中で“わたしがこの世に来たのは、さばくためである。すなわち、見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである”(9:39)と変えている。そして“もしあなたがたが盲人であったなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところに、あなたがたの罪がある。”(9:41)と結んでいるのである。1:18に“神を見た者はまだひとりもない。ただ父のふところにいるひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである”と記されている言葉も、イエスの復活を自分の手で実証してみない限り信じないと頑張るデドモと呼ばれるトマスに“あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいであると言われるイエスの言葉で結んでいることが注目されてよい。

結 び

以上に述べて来たことは聖書を書き残した人たちが、それを書き残すに至ったインパクトの宗教性が何にあったのかを求めそれによってキリスト教の独自性を見出すことにあった。しかし、私がして来たことは、遠くから眺めて美しいナと感じた山に単身登り始めて路が意外に険しいのに途惑っている感を与えているかもしれない。私自身は道すがら垣間見た山の美しさに益々魅力を感じて来たのではあるが。

四福音書の中のヨハネによる福音書に、この小論を結びつけたのは、この福音書が宗教性を示すインパクトを一番端的に表現しているのではないかと考えたからである。恐らく、当初のユダヤ人たちにとって、イエスの死と復活という問題は最大のインパクトを与えたものであったであろう。しかし一世期近い時の経過と共に、そのインパクトは衰退し、教会の形成がキリストの宗教性だけを強調するようになったかもしれない、そして、その反面、反キリスト教の勢力が抬頭して、それが新たなインパクトを教会の人々に与え、それに答えるための福音書が必要になったということも推測できる。それがこの福音書を書かせ、他の既存のものとはその内容も表現も著しく違ったものとさせている因

子でもあり、又はそれがキリスト教の独自性を強調することにもなったであろうとも考えられる。

このような見方をしてみると、宗教性を示すインパクトという問題は聖書の成立に大きな関係をもつ問題であることが考えられてくる。所謂西欧キリスト教と呼ばれている教会の神学は、これを俯瞰すると、一部の専門的な、あるいは特異な人たちを除く大半の現代人には殆んど無関係なものになっていると言えるかもしれない。多くの人々がそれらの神学に宗教的なインパクトを感じなくなっているのである。

近代社会は人々のインパクトに答えるのに科学、教育、経済、政治等々をもって答えて来た。そうして世界は開発国と未開発国とに二分されてしまっている。興味深いことは、この開発国と未開発国との中間にある国の人たちに宗教的要求が大きく見られることである。このような現象は決して偶然とは言えないであろう。他方開発国の人々はエントロピーの問題に眉をひそめる、今日の文明文化の行く末に不気味な怯えを感じ始めているのである。そればかりでなく、アダムとエバの問題が新たな問題を提供し、科学者をではなく、社会学者を忙がしく馳り立てている現状である。

このような現実の世界にあって、無数と言ってもよい程の数々のインパクトにさいなまれている現代人に、キリスト教が何らかの形の宗教性を与え得るとすれば、それは従来神学に則ったキリスト教であるのだろうか、これには疑問がある。今日第一線で活躍している伝道者たちは苦闘しているのである。私には、キリスト教の独自性とは、何なのかが問い直さなければならない時が来ているように思えてならない。

附記 この小論を手がけているさ中に、私は Edward Schweizer の “Luke” A challenge to Present theology, SPCK を手にすることができた。この書の出現は西欧キリスト教会の中からも現代神学への挑戦が始まっていることを物語っている。

〔註〕

- (1) N. C. C. の宗教研究所は日本聖公会京都教区ビル内に在る。
- (2) 日訳注解「聖クラーン」世界イスラーム連盟発刊
- (3) 「イスラーム哲学史」H・コルバン著，黒田寿郎・柏木英彦訳，岩波書店
- (4) 同 上 P.1～2
- (5) 私は，このような規定の仕方自体がイスラーム的であることに注目したい。
- (6) イスラミックセンター・ジャパン発行「イスラームの政治理論」P.4
- (7) 前掲「イスラーム哲学史」P.30
- (8) 前掲，日訳注解「聖クラーン」P.Ⅲ
- (9) イスラミックセンター・ジャパン発行「聖コラーンとハデイス」P.11～12
- (10) イスラミックセンター・ジャパン発行「宗教は過去のものか」P 5
- (11) 同 上 P.6
- (12) 同 P.6～7
- (13) 同 P.7～8
- (14) 同 P.10～11
- (15) 同 P.12～13
- (16) 同 P.13
- (17) 同 P.14～15
- (18) 同 P.19～20

1974年にThe Lausanne Congress on World Evangelisationが開催されThe statement on Radical Discipleshipが公表されている(“Radical Discipleship” by Christopher Sugden, Marshalls 1981) この会議は上述したような今迄のキリスト教会の在り方を深く反省し，キリスト者はすべて真のキリストのDiscipleとならなければならないとする新たな発足となった会議である。

- (19) 36：3の系図では「ネバヨテの妹バスマデ」となっている。詳細は不明
- (20) Charles Goreはこの部分に対して“Although St. Pauls’ allegorical interpretation may not mean much to modern readers”と記している。

パウロは，また上述の引用とは別にローマ4：16～22に“このようなわけで，すべては信仰によるのである。それは恵みによるのであるのであって，すべての子孫に，すなわち，律法に立つ者だけにではなく，アブラハムの信仰に従う者にも，この約束が保証されるのである。アブラハムは，神の前で，わたしたちすべての者の父であって，「わたしは，あなたを立てて多くの国民の父とした」と書いてあるとおりである。彼はこの神，すなわち，死人を生かし，無から有を呼び出される神を信じたのである。彼は望み得ないのに，なおも望みつつ信じた。そのために「あなたの子孫はこうなるであろう」と言われているとおり，多くの国民の父となったのである。すなわち，およそ百歳となって，彼自身のからだか死んだ状態であり，また，サラの胎が不妊であるのを認めながらも，なお彼の信仰は弱らなかった。彼は，神

の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、神はその約束されたことを、また成就することができると確信した。だから、彼は義と認められたのである。”と律法によるのではなく、信仰の義によることを強調している。

- (21) マタイ福音書にはイエスを花婿に躓えて、“イエスは言われた「婚礼の客は、花婿と一緒にいる間は、悲しんでおられようか、しかし、花婿が奪い去られる日が来る。その時には断食するであろう」”(9:15, マルコ 2:19~20, ルカ 5:34~35)と記されている。更にマタイには「花婿を迎えに出る十人のおとめの 」(25:1~13)が記されている。ヨハネによる「カナの婚礼の奇蹟」と対照的記述として考えられてもよいかもしれない。